

栽培漁業推進対策事業

濱地寿生（増養殖部）安江尚孝・土居内 龍（資源海洋部）

1 目的

栽培漁業対象種であるマダイ、ヒラメ、イサキ、アワビ類について放流種苗の混獲状況の把握、並びに今年度から本格的な放流が行われたクエについて漁獲実態調査を実施し、放流効果を検討する資料とする。

2 方法

1) 放流種苗調査：マダイ・イサキは鼻孔隔皮の欠損、ヒラメは無眼側の体色異常を標識として放流種苗の有標識率を調べた。

2) 漁獲物の標識魚混獲率調査：マダイは雑賀崎漁業協同組合（以下、漁業協同組合は漁協と略記する）に水揚げされた0歳魚の標識魚（鼻孔隔皮欠損魚）の混獲率を調べた。

ヒラメは湯浅湾漁協湯浅中央本所、比井崎漁協、紀州日高漁協南部町支所に水揚げされた魚の標識魚（無眼側体色異常魚）の混獲率を調査した。

イサキは和歌山南漁協田辺本所に水揚げされた魚の標識魚（鼻孔隔皮欠損魚）の混獲率を調べた。

アワビ類は、和歌山東漁協下田原支所において水揚げされたメガイアワビの殻頂部を削り人工種苗由来のグリーンマークの出現割合を調査した。

3) クエ漁獲実態調査：和歌山県下における主なクエ水揚げ市場である和歌山東漁協串本本所市場と紀州日高漁協南部町支所市場の漁獲統計資料の収集・整理を行った。

3 結果

1) 放流種苗調査：マダイの有標識率は和歌山市加太放流群（平均尾叉長 $71.3 \pm 4.8\text{mm}$ 、調査尾数 311 尾）で、6.1%と前年の 23.9%に比べ大きく減少した。

ヒラメ放流種苗の有標識率は印南町放流群（平均全長 $93.0 \pm 9.8\text{mm}$ 、調査尾数 65 尾）、みなべ町放流群（平均全長 $91.8 \pm 9.7\text{mm}$ 、調査尾数 100 尾）とも 100%であり、調査した放流種苗すべてに無眼側の体色異常が認められた。

イサキの有標識率は田辺市放流群（平均尾叉長 $61.1 \pm 4.6\text{mm}$ 、調査尾数 191 尾）で 31.9%と前年の 25.6%と比べ若干増加した。

2) 漁獲物の標識魚混獲率調査：雑賀崎漁協でのマダイの混獲率は、標本魚の入手が 82 尾と少ないこともあり標識魚はみられなかった。

ヒラメの混獲率は、湯浅湾漁協湯浅中央本所（4～3月、調査尾数 1,110 尾）が 13.9%、比井崎漁協（9～3月、調査尾数 515 尾）が 14.8%と前年の 7.7、8.3%に比べ増加したが、紀州日高漁協南部町支所（9～3月、調査尾数 4,779 尾）では 1.9%と前年の 2.0%とほぼ同じであった。

和歌山南漁協田辺本所におけるイサキの標識魚混獲率（4～3月、調査尾数 2,216 尾）は 0.5%で前年の 0.4%とほぼ同じであった。標識魚は合計 10 尾で、内訳は 1 歳魚 1 尾、2 歳魚 1 尾、3 歳魚 2 尾、4 歳魚 3 尾、5～7 歳魚が各 1 尾であった。

和歌山東漁協下田原支所におけるメガイアワビの混獲率（調査数 193 個体）は、68.0%で前年の 67.3%から若干増加した。

3) クエ漁獲実態調査：和歌山東漁協串本本所市場と紀州日高漁協南部町支所市場での漁獲量の推移および平成 22 年月別漁業種類別の漁獲量を図 1、2 に示す。和歌山東漁協串本本所市場では昭和 62 年、平成元年に 5 トン近い漁獲がみられたが、平成 2 年

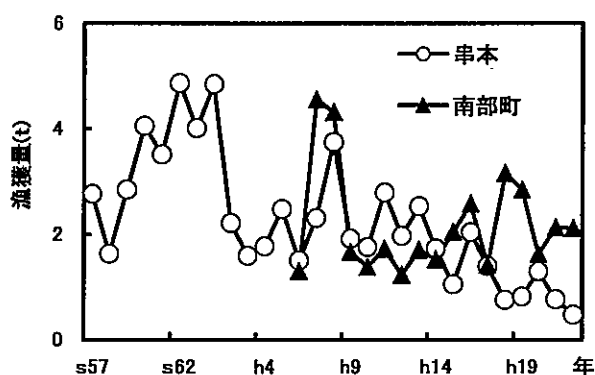


図1 クエ漁獲量の推移(和歌山東漁協串本本所・紀州日高漁協南部町支所)

に2.2トンまで急減し、その後は増減を繰り返しながらも減少傾向を示し、平成22年は約0.5トンと少なくなった。平成22年の漁業種類別の漁獲割合は延縄が52%を占め、次いで定置網の29%、一本釣りが14%、イセエビ刺網等が5%であった。また、月別にみると3月を除いた全ての月で漁獲がみられ、ピークは11・12月であった。

紀州日高漁協南部町支所市場では平成7・8年に4.5トン前後、平成18・19年に3トン前後の漁獲があったが、その他の年は2トン程度で推移している。平成22年漁業種類別の漁獲割合は延縄が90%以上を占め、残りがイセエビ刺網等、一本釣りであった。月別にみると大部分が9～12月に漁獲され、特に10・11月は極めて多くなった。

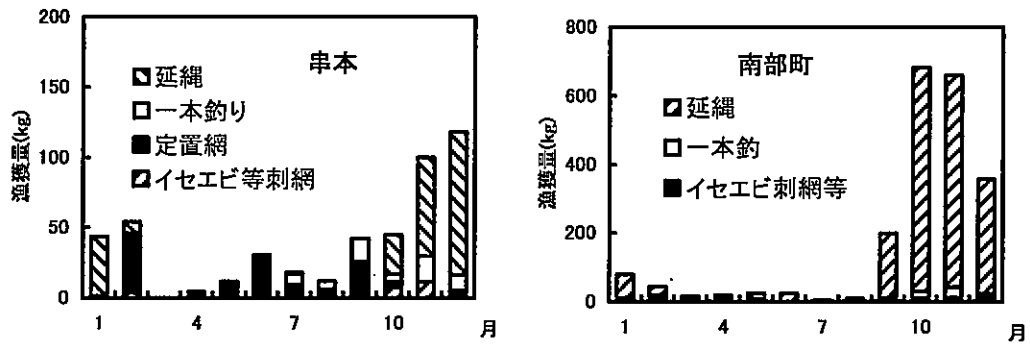


図2 クエの平成22年月別漁業種類別漁獲量(和歌山東漁協串本本所・紀州日高漁協南部町支所)